

〈研究資料〉

オイゲン・ヘリゲル著

「日本民族の生活と文化における伝統」全訳と解題

翻訳・秋沢美枝子、解題・山田奨治

解題

近年の日本国内でのオイゲン・ヘリゲル（二八八四―一九五五）研究の進展や武士道ブームを受けて、ヘリゲルの足跡を見直す動きがみられる。<sup>(1)</sup>ヘリゲルの著作権が二〇〇五年末に消滅したことを受けて、『弓と禪』<sup>(2)</sup>（一九四八）を『無我と無私』<sup>(3)</sup>（二〇〇六）というタイトルで新たに翻訳し直した本が出版された。二〇〇七年末の時点で二六〇万部のミリオンセラー『国家の品格』<sup>(4)</sup>（二〇〇五）を書いた藤原正彦（一九四三―）が監修し、夫人の藤原美子が翻訳していることが話題を呼んだ。稲富栄次郎（二八九七―一九七五）らによる旧訳と較べて現代人には読みやすい文章になっていることもあって、この新訳は日本の読書界に一定の浸透をしているようである。しかしながら、旧訳を下敷きにしたうえで英語版からの重訳であるゆえに、旧訳での誤訳がそのまま残っている点や、「訳者あとがき」で事実関係

を誤認している点<sup>(7)</sup>があり、学術的な意義は疑問視せざるをえない。とはいえ、「『品格のある日本人』に出会える感動の書！」（同書帯）という触れ込みからもわかるように、「品格ブーム」「武士道ブーム」に安直に反応する人口が日本国内に増えている。そうしたブームに影響された読者を惹きつけている。ことヘリゲルにかんしていうならば、日本文化の理解者、西洋への禅の紹介者としての彼のイメージは、彼のライフ・ヒストリーのなかのそれにふさわしくない部分を隠蔽して成立してきたものだった。『日本研究』第24集に採録された論文で、解題者はヘリゲルが一九四五年以前に執筆した論文のうち、未訳でありかつその存在がほとんど知られていないものがあることを指摘した<sup>(8)</sup>。それら未訳論文のうち、「国家社会主義と哲学」<sup>(9)</sup>（二九三五）「サムライのエトス」<sup>(9)</sup>（一九四四）の全訳と解題が『日本研究』第32集に掲載された。ここに紹介する資料は、残る未訳論文のうちのひとつ、「日本民族の生活と文化にお



写真 Herausgegeben von Richard Foerster.  
Kulturmacht Japan. Die Pause, 1942.

ける伝統」(一九四二)である。この論文は、先に訳出した二論文とともに、ヘリゲルが戦中に表明していた日本文化観をあまりににするうえで欠くことのできないものである。

「日本民族の生活と文化における伝統」は、リハルト・フェルスター (Richard Foerster, 1879-1952) 編による『文化大國・日本』(一九四二年)<sup>(10)</sup> に収められている(写真)。編者のフェルスターは海軍の軍人だった。<sup>(11)</sup> 一九三三年に海軍司令官になり、軍を退役したのち、一九三七―四五年のあいだベルリン独日協会の会長を務めた。<sup>(12)</sup> フェルスター自身には日本文化にかんする本を編集するだけの経歴はない。じっさいに編集したのは独日協会に所属していた無名の担当者で、フェルスターの名前は「お飾り」であろう。

本書には駐ドイツ大使だった大島浩(一八八六―一九七五)が序文を寄せている。収録されている論文と執筆者は、つぎのとおりである。

- ワルター・ドーナト<sup>(13)</sup> 「日本 その民族存在の原理」<sup>(14)</sup>
- オイゲン・ヘリゲル 「日本民族の生活と文化における伝統」
- カール・ハウスホーファー<sup>(15)</sup> 「文化大國・日本 文化大國としての日本の政治的歩み」<sup>(16)</sup>
- レオポルド・G・シャイデル<sup>(17)</sup> 「日本 国と民族」<sup>(18)</sup>
- マックス・ヒンダー<sup>(19)</sup> 「日本人」<sup>(20)</sup>
- ウィルヘルム・グンダート<sup>(21)</sup> 「日本文学作品の頂点」<sup>(22)</sup>
- オットー・キュンメル<sup>(23)</sup> 「日本の芸術」<sup>(24)</sup>
- 守屋謙二<sup>(25)</sup> 「日本の生活様式のなかの美術工芸」<sup>(26)</sup>
- ゲオルグ・シュルネマン<sup>(27)</sup> 「日本の音楽」<sup>(28)</sup>
- ゼンイチ・ヤマニシ<sup>(29)</sup> 「日本の演劇」<sup>(30)</sup>
- 邦正美<sup>(30)</sup> 「日本の舞踊」<sup>(31)</sup>
- ヨハネス・バルト<sup>(32)</sup> 「日本映画界の動向」<sup>(33)</sup>
- 村田豊文<sup>(34)</sup> 「日本の青少年教育」<sup>(35)</sup>
- マックス・トレープスト<sup>(36)</sup> 「ドイツのなかの日本」<sup>(37)</sup>

『文化大國・日本』は、日本文化の総合的な紹介本として作られている。数多くの写真を掲載し、グラフ誌のような構成になっているが、オリエンタルを強調した図版ばかりが選択され

ている感は否めない。これらのなかにあつてヘリゲル論文は、日本文化の伝統性・精神性、花見の美学、輪廻、天皇崇拜、犠牲死の賛美について論じている。本書の出版時にヘリゲルはエランゲン大学副学長の職にあり、本論文はナチ政権下の大学で同盟国・日本の国家体制を独特の解釈を交えて讃える内容に終始している。その最大の特徴は、彼の信念であつたはずの日本文化⇨禅仏教論には触れずに、そのかわりに国家神道を日本文化の精神的な支柱に位置づけるといふ、体制迎合的な姿勢をとっている点にある。このあたりに、その時代を生きたヘリゲルのしたたかさが垣間みられるといつては言い過ぎだろうか。

本論文が収められている本のタイトルが『文化大国・日本』であることも興味深い。今日では「文化大国」の用語は、「軍事大国」あるいは「経済大国」の対語として用いられている。「軍事大国・日本」が終わり、「失われた十年」を経て「経済大国・日本」も終わり、これからは「文化大国・日本」を指さなければならぬといった論調をよく耳にする。平成十三年に設置された文化審議会の第一回議事要旨をみても、「諸外国に日本に対し敬意と友情を抱いてもらうためには、文化大国としての評価を得なければならぬ。そのためには、伝統文化を次世代へ継承していくとともに、万国共通のルールに基づいた文化を伸長しなければならない。」「伝統文化に限らず、現代の文化や、お茶・お花等の生活文化も含めて日本文化に対する海外の興味・関心は高く、もつと自信を持つてもいいと思う。日本

は文化大国たる可能性を有しており、そうした文化を今後一層発展させていくことが大切である。」といった発言がみられる。<sup>(38)</sup>しかし、そうした「文化大国」論は、一九四二年の本書においてすでに試みられている。

『文化大国・日本』をみる限り、「軍事大国」と「文化大国」とは共存しうるものであり、一九四〇年代に日本を「文化大国」と評価する動きがドイツにあつたことが、本書から窺える。日本にとつて「文化大国」といふ評価は過去の栄光でもあり、決して未来志向の政策標語とはいひ切れない。「軍事」「経済」「文化」のいずれであろうが、「大国」といふ接尾語が喚起するヘゲモニー意識をもつと自覚すべきではないか——『文化大国・日本』は、そんなことを思い起こさせてくれる歴史的な書物である。

### 日本民族の生活と文化における伝統

オイゲン・ヘリゲル

日本民族は、非常に古い、何千年を通してその存在が一度も根底から危険にさらされたことのない伝統のあることを当然誇ってしかるべきである。中国文化の摂取や、またわずかに、三世代にも満たない以前の、ヨーロッパの学問及び技術、そしてまたそれと同時にヨーロッパの生活様式の摂取のような、日本民族の生活様式を根本から覆すような変化をもたらした時代で

さえも、この伝統の深部に手をつけることはできなかったのである。日本民族は、その並外れてしつかりした本能で、自分たちと与えられた撰取の可能性が限界に達したと感付くたびに、つまり、もしその限界を超えると、外国の新しいものが一つでも増えるにつれて、自分たち固有のものを失うという代価を支払わねばならないということに感付くたびに、氣力を奮い起こして、その限界を超えて踏み出した最後の一步をひっこめ、いっそう注意深く我に立ち帰り、精神集中のために一時休んだあとで、自分の道を見付けたのであった。世界中で日本民族ほど、疑いもなく自分たちの伝統に結び付いている民族はいないが、ちょうどそこにこそ、日本民族の強さの秘密と、自分たちの永遠なる使命へのゆるがざる信念の秘密とがあるのだ。

ここで、私は、この「とこしえに続いている」伝統について論じてみようと思う。この「伝統」のかたわらに、歴史的な発展の途上で形づくられたいくつかの特別な「伝統」があるのは自明のことである。それらは、それ自身の中に、それぞれの状況からのみ理解が出来、かてて加えてさまざまな影響を受けて変化した意味内容を含んでいる。その二、三の例をあげると、手工業、芸術また宗教生活の分野などにみられるいくつかの特別な伝統がそうである。そしてそれらを究明するのは魅力のあることであるし、またそうすることによって教えられるところも多いであろうが、しかし別な特殊な研究を通してのみそれが可能となるのだ。その場合には、これらの特別な伝統から、伝

統の日本的な概念を著しく豊かにするような、その典型的なさまざまな特徴がはつきりと見えて来るかも知れないし、また日本民族の生活そして日本文化のすみずみまで光を当てることができるかも知れない。そして結局我々は、仏教に起源をもつが、宗生活以外にも行われて、その矛盾した表現形態のゆえに局外者には全く近寄りたがいが、内部の人には「偉大な芸術」の究極をさとらせるような、例の「秘伝」(“geheimen” (Traditionen)) の諸伝統をも詳しく論じなければならぬことになるであろう。しかし、これらに我々が取り組むのは当然不可能なことであつて、簡単に輪郭を描いたところで、それだけではほとんど何もたらさずに終わってしまうであろう。それがある程度読者に理解してもらうためにも非常に詳しい説明が必要となるであろう。

ところで、先ずここで指摘しておかねばならないことは、日本民族の生活と文化には、ややもすると対立概念に硬直化しかねないような教条主義的な規定を本能的に避けるような姿勢があらわれているということである。言うまでもなくこの姿勢は東アジア全般にみられるものであつて、ただ単に日本にのみ見出されるものではない。しかし、日本を見ると、その姿勢が特に目立ってくるのである。というのも、日本はヨーロッパの学問を取り入れ、それとともに概念のきびしい識別の必要性をも徹底的に受け取った東アジアの唯一の国であるからである。それにもかかわらず、日本人 (the Japanese) <sup>(訳注1)</sup> は、その存在の理解

(*Geistverständnis*) において根本のところでは外部に惑わされる  
 ことがなかった。彼らは、自然と文化、あるいは自然と人間の  
 精神とをはっきり区別はするが、この便利な概念的区別が現実  
 の区分につながるとは信じないのである。それで彼らにとって  
 文化とは自然と対立するものでなく、つまり自然全体より優れ  
 ている人間の精神の王国であるということを意味せず、自然の  
 切れ目のない連続であると思われるのだ。それゆえ、人間のす  
 べての文化的な行いは、結局、自然が糸を垂れたところでも  
 糸を拾い上げ、自然をただ人間自身の中で完結させる、とい  
 うところにあるのだ。彼らにとって人間の精神というものは、い  
 わばただ自然の手をとって、しかも自然を、精神が自然そのも  
 のを感知してそれを完成させる時だけ、正しく導くと言えるの  
 である。

このことからはじめて、日本人(*der Japaner*)<sup>(訳注2)</sup>が、日常の所  
 作といえども精神的なものを強調するという、日本人に際立っ  
 ている願望が正しく見えてくるのである。日本人がそうするの  
 は、そうしなければ物足りないからではなく、それらの所作に  
 本質として潜在しているものがそこから取り出され、明らかに  
 されると考えるからである。こういう作業にかくれているもの  
 は、特に活発な、さまざまな遊びごころの造形衝動ではなく、  
 遠慮がちな補助だけで満足するよううやうやしい観照の姿勢  
 である。このようにして、文化生活と精神生活の崇高な現象で  
 すらも、種々の段階でその母なる大地と結び付けられるので、

どこにも内部分裂が生じることはあり得ないのである。

さくらの花の美しさを心から賞でて毎年行われる花見の宴ほ  
 ど、このことが美しくまた明白に表れることはないようである。  
 それはまるでさくらの花を咲かせる力が人間の精神に乗り移っ  
 たかのようなのである。その花見の宴は、全く各自が自由で、少し  
 も強制されるところがないにもかかわらず、讚嘆の気持ちを共  
 同で味わうという浮き浮きした楽しみとなるのである。この振  
 る舞いに、うらやむべき子供らしさと幸せな素朴さ以外のなに  
 ものをも見ない人は、あるいはそれは結局ただ単に自然に向か  
 って喜んで花見の宴を「催す」人間に過ぎないのだと思ひ誤る  
 人は、この喜びが、自然そのものの祝典を精神的に反映する以  
 外のなものでもないという、まさにその決定的なことを見過  
 ごしてしまうのである。この花見の宴をたびたびそして開かれ  
 たところをもって経験することの出来た人は、日本人がその宴  
 をそのように見ているということが分かるのである。

だが、ちょうどこれとの関連で、その伝統の更なる特徴が指  
 摘できるのである。それはこの花見の宴がさくらの花の美しさ  
 を観賞するに尽きるということである。さくらの花が爛漫と咲  
 き誇っている枝に手をかけて折り取る者などはいない。自分の  
 部屋を木の花や草花で飾りたいと思う人は、それらをていねい  
 に扱う花屋で求める。日本人は、子供の時からさまざまな機会  
 を通して、ただ花を賞でるだけで気持ちが悪されることを学ん  
 でいる。日本人は、すでに実行された確実な行動があるにもか

かわらず、また緊急の場合には素早くそして容赦なく行動する能力があるにもかかわらず、この観想的氣質を捨て去ることなく、観想と行動をこれ以上なくうまく結合させているのである。日本では、しばしば何時間にもわたる精神の集中と沈思（たとえば茶室での喫茶と結びついた）の後にきわめて重大な結果を招来するような決定がなされるが、ここではそれが無理なく説明できるのである。

このように自然と文化、自然の生活と精神生活が継ぎ目のない統一を形作っているので、日本人がそれ以外にも通常の規定・区別をすることには、たとえそれがどれ程世間でさわがれていても、たいした興味を示さないだけでなく、実生活ではそれをますます顧慮していかないということが理解できるのである。その結果、日本人の生活している領域は、当然我々のそれよりもはるかに漠然としているが、その代わりより豊かなのである。日本人は生がこれ以上なく満たされた、また充実した現実のなかで行動しているので、現実を発見し、また現実に関与するためにまれに訪れる靈感を待つ必要もないのである。つまり彼の日常の生活が生の実実を彼にたえずはつきり見せているのである。というのは日本人が「存在する」ことは、ただ一つの輪から輪へと将来に連なっていく鎖の輪のひとつとして存在するという意味なのである。日本人は自分の人生で過去の人生、つまり祖先のそれを生き、引き続きまだ未知である将来に向かってその人生をもっていく。だが、その際日本人は、祖先というも

のはただ影のように暗い過去から合図するものだとは思わず、自分をその祖先よりも「実在する」ものとも思っていないのである。彼はその肉体的実在のすべてにおいて、実際はただ単に意識のひかりがあてられたひとつの移行現象にすぎないのである。そして日本人の現実には、その肉体の実在に、つまり捉えられ、また感じられるものにかかるものではなく、彼を通過して行く過去と未来を結び付けるものなかに、つまり血の徳と精神のもろもろの力の中に求められるべきものなのだ。

祖先崇拜をとつても、もしそれをただ美しい風習であるとか、敬虔な気持ちのあらわれであるとか、象徴的に高められた追悼であるとのみ見なすならば、それをあまりに軽く理解してきわめて表面的に説明することになる。日本人にとつては、自分があらゆる面でヨーロッパに啓蒙されたにもかかわらず、祖先は故人となつて消えたものでなく、生きて現存するものなのである。祖先は、つまるところ、現在その家族生活を担う人たちよりもより一層現実的なのである。現在の人たちは、ただすでにしかれた道を先に進むが、道そのものではなく、自分たちは道のほんの一部をなすだけで、代々の鎖の輪に輪を付け加えることによつてはじめて祖先の現実に参加するのである。彼らの、祖先との親密なきわめて「人間的な」交わり、つまり、特定の機会に祖先に家族に関するすべてを報告する義務（そうしなければ祖先がそれについて何も聞き知らないというのではなく、そこで自分自身を伝えることでもある生き生きした繋がりがうすれない

ために)、結局、これらに於いて、現在と過去、故人と現在に生きるものとの間に区切りなく存在する真の生命の繋がりが維持されるのである。

日本人は、親子の関係、きょうだい同士の関係、また知り合いとの関係をきわめて真剣に、また良心的に保とうとする義務感を抱いている。とはいっても、日本人にとって祖先に対する責任は、それに勝るとも劣らぬ重要性をもっている。その祖先の代々の列を損なうことなく続けること、自分自身ではなくその代々の列に奉仕することが、日本人の心を占める最大の心配事なのである。そんなふうには自分は列のただ一つの輪に過ぎないゆえに、「自分であること」、つまり自分の個性を主張しようとする誘惑にかられることがないほど、なによりも「全体」が強調されるのである。彼らは先賢の生活の知恵を肝に銘じて、一切の個人的な痕跡を残さないようにする。しかし、自分たちが生命の流れに、そしてそれと共に家族の生きている伝統に溶け込みながら、それらを高めて子孫に伝えていくということ、それが日本人には自分の人生の真の意味であると思われるのである。そしてもし名譽と名声が与えられるようなことになっても、それらは彼ら個人についているものではないのである。もし罪になるようなことが起こっても、一切彼が個人的に責任を負ったり、贖ったりすることが出来ないのと同じように。

ところで「五常」(Fünf Beziehungen) <sup>(徳性)</sup>の第一は、臣下の天皇

に対する関係である。この天皇に対する関係には、日本の伝統に従えば、日本の一つ一つの家族はその中心を自分のなかにもっているのではなく、自分の中から生きて行動するのでもないという基本的な事実が表明されている。家族の真の中心は天皇(Tenotum) <sup>(親性)</sup>にあるのだ。そして天皇は、その神々しい祖先の列を続けて、日本民族全体の神々しい起源の代表となるのである。そしてこの起源のゆえに日本民族ははじめて自分を「民族」と感じるのであり、天皇とその神々しい使命のゆえに、帝国は日本民族にとってははじめて真に「帝国」となるのである。天皇は彼の祖先に民族の運命を報告することによって、同時に大司祭にもなるのである。そして彼が聖地である伊勢に大司祭として民族の祈願を述べる時に、天皇と民族のこの一体を奉じ、その統一によって民族はただひとつの家族にされるのである。

天皇(Tenotum) <sup>(親性)</sup>というものは、日本人にとっては、天皇の伝説的な意味を意識しているような(たとえただ心中ひそかにであるとしても)、単なる美しい観念ではないのである。日本人にとって、天皇は、自分の家族生活を支える祖先崇拜と同じく、天皇(Tenotum)と結びついた理念が、ひとつの現実そのものの表れであり、絶対的な存在の象徴なのである。つまりここにも、その存在の理解(Seinsverständnis)の根底に、すでに何回も強調してきた、自然的なものと神的なもの的一致するという統一の観照(Einheitschau)があるのだ。それは、その趨勢が未知数であるイギリスとアメリカ合衆国に対する軍事的

諸成功が、ただ単に兵士の勇敢さと指導部の深謀術策に帰せられるだけでなく、天皇の「高貴な徳性」に求められているという決意を、決して古代から引きずってきた言いまわしとしてではなく、最も活気ある、そして最も誠実な確信の表現であると思われるべきだというところに、上記の存在の理解の意義の重大さが最も明確にあらわれている。

この天皇 (Emotum) の現実とその神々しい高みから湧き出る生の大河に、この「とこしえに続いていく伝統」は根ざしているのである。かむながらの道が同時に天皇の道であることよって、この天皇の道は全日本民族の道となるのである。しかしそれはもちろん自然のことではなく、また必然のことでもなく、ただ民族が自分の生まれながらの身分、つまり天皇の民族であるという信念を表明し、その信念を疑いのない服従と絶対的な忠誠をもつて確証する場合にのみなのである。服従と忠誠は、その後この上ない究極の犠牲、つまり生命自体を賭すことも辞さないという覚悟のある場合にのみ、本物となるのである。そういうことで、以前武士によって実践された武士的・軍人的な基本態度が全民族の生活の理想像となるのである。そして日本民族には、この疑問の余地のない死の覚悟は、ただの可能な限り従わなければならない基本的な思想なのではなく、自明の行動となるほど、この理想は現実的に理解されているのである。生命を犠牲にすることによってはじめて生そのものが生かされ、犠牲死がもつとも実り尽くしている実であるという

基本的確信は、この思想と行動の統一に由来しているのである。日本人は、生に対するおろかな無関心からではなく、その生の上のこれ以上ない充足を知っているからこそ、死の恐怖を知らない一人も生きて帰れない軍事行動に参加するのは、日本の兵士にはこれ以上ない普れと思われるのである。

というのは、日本のとこしえの伝統は、二本の柱、つまり日本の理念である伊勢と武士的・軍人的精神の現実とに支えられているのである。

原題 Eugen Herrigel, "Die Tradition im japanischen Volks- und Kulturleben." *Kulturmacht Japan*. Herausgegeben von Richard Foerster. Wien: Die Pause, 1942, pp. 14-15.

翻訳 秋沢美枝子

#### 解題注

(1) 謝辞 本稿執筆にあたって、ウォルフガング・シャモニ氏ならびにマルクス・リュッターマン氏より多大なご教示を受けたことを感謝します。

たとえば、朝日新聞二〇〇七年二月六日の夕刊の記事『「弓と禅」で知られる独哲学者 ヘリゲルに再び脚光』など。

(2) Eugen Herrigel, *Zen in der Kunst des Bogenschusses*. Otto Wilhelm Barth-Verlag, 1948.

(3) オイゲン・ヘリゲル (藤原正彦監修、藤原美子訳) 『無我



- と無私——禅の考え方に学ぶ』ランダムハウス講談社、二〇〇六年。
- (4) 藤原正彦『国家の品格』新潮新書、二〇〇五年。
- (5) オイゲン・ヘリゲル(稲富栄次郎、上田武訳)『弓と禅』協同出版、一九五六年。(現在は福村出版から刊行されている。)
- (6) たとえば、藤原は“Grose Lehre”の語を稲富らの訳を引き継いで「奥義」としているが(『無我と無私』七頁)、この語はヘリゲルの師匠の阿波研造(一八八〇—一九三九)の独自思想だった「大射道」と訳するのが正しい。
- (7) ヘリゲルのベルリン独日協会での講演を一九三九年、阿波研造の没年を一九三〇年としている点(正しくはそれぞれ一九三六年、一九三九年)は誤植だとしても、講演の演題が「弓と禅」だったとしている点、岩波版の『日本の弓術』を改訂したのが『弓と禅』で、一九八一年に福村出版から出たとしている点は誤解である。ヘリゲルの一九三六年の演題は「騎士的な弓術」(“Die ritterliche Kunst des Bogenschessens”)であり、それを邦訳したものが岩波版の『日本の弓術』である。『弓と禅』は『日本の弓術』を下敷きにはしているものの、それとは独立に執筆されたものである。加えて『弓と禅』の初版は一九五六年で、協同出版から出されている。
- (8) 山田奨治「オイゲン・ヘリゲルの生涯とナチス—神話としての弓と禅」(2)『日本研究』第24集、二〇〇二年、二〇—二二六頁。
- (9) 秋沢美枝子、山田奨治「オイゲン・ヘリゲル著『国家社会主義と哲学』『サムライのエトス』全訳と解題『日本研究』第32集、二〇〇六年、二八五—三一五頁。
- (10) Herausgegeben von Richard Foerster. *Kulturmacht Japan. Die Pause*, 1942.
- (11) ちなみに、Deutsche National Bibliothekのデータベースでは、同名同名の文献学者(一八四三—一九二二)と混同されている。
- (12) *Deutsche Biographische Enzyklopadie*. 2nd ed. Vol. 3. Saur, 2006, p.41.
- (13) Walter Donat (1889-1970) 井原西鶴や川端康成の翻訳で知られる日本学者。
- (14) “Japan-Die Prinzipien seiner volkischen Existenz.”
- (15) Karl Haushofer (1869-1946) 地政学者。彼の理論はヒトラーの政策に理論的な根拠を与えたともいわれている。
- (16) “Japans politischer Werdegang als Kulturmacht”
- (17) Lepold G. Scheidl
- (18) “Japans Land und Volk.”
- (19) Max Hinder
- (20) “Japaner.”
- (21) Wilhelm Gundert (1880-1971) 東洋学者。中国仏教、日本仏教が専門で、『碧巖録』の独語訳がある。
- (22) “Hohepunkte japanischer Dichtung.”
- (23) Otto Kummel (1874-1952)

- (24) “Kunst in Japan.”
- (25) 美術史学者（一八九八—一九七二）。
- (26) “Kunstgewerbe im japanischen Lebensstil.”
- (27) Georg Schunemann
- (28) “Musik in Japan.”
- (29) 生没年不明。
- (30) 舞踊家、本名は江原正美（一九〇八—二〇〇七）。
- (31) “Japanisches Theater.”
- (32) Johannes Barth (1891-1981)
- (33) “Japanisches Filmschaffen.”
- (34) 倫理学者（一九〇三—一九九七）。
- (35) “Japanische Jugenderziehung.”
- (36) Max Trebst
- (37) “Japan in Deutschland.”
- (38) 第一回文化審議会議事要旨  
[http://211.120.54.153/b\\_menu/shingi/bunka/gijiroku/001/010201.htm](http://211.120.54.153/b_menu/shingi/bunka/gijiroku/001/010201.htm)（二〇〇八年三月二十四日閲覧）。

翻訳注

[1][2] 原著者は、注1の箇所日本人を「die Japaner」と複数で表しているが、注2の箇所からは最後まで一貫して「der Japaner」と単数で表現している。単数にした場合には、日本人全体があたかも一人の人格をもつ固体であるかのような意味合いを帯びてくる。しかし翻訳ではその違いが表現出来ない

いので、文章の流れから適宜「日本人」または「彼」と翻訳しておいた。

[3] ドイツの中国学では、以前から「五常」の訳語として *fünf Beziehungen* という語が定着している。ここではもちろん孟子の説く人間関係で守るべき道である儒学の「五常」に日本的な解釈を与えているのである。

[4] ヘリゲルは、天皇に関して、Kaiser, Tenno, Tennotum という三つの異なる語を用いている。前二語の訳語は「天皇」で問題ないが、Tennotum の訳語はいさゝか問題である。この語は、天皇にまつわる制度的、思想的、宗教的なことを総合して表現する用語であり、いちおう「天皇制」という語が訳語として考えられるが、政治的意味合いのつよいことではあるのでここでは「天皇」と訳した。しかし、原文にTennotum とある箇所はそれを明記した。